



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	いじめ傍観者の援助行動を促進する要因及び教師と生徒のいじめ介入要因：日本と中国の分析を通して(論文要旨)
Author(s)	元 笑予
Citation	
Issue Date	2020-09-22
URL	http://hdl.handle.net/2309/166471
Publisher	
Rights	

氏 名 : 元 笑予
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 349 号
学位授与年月日 : 令和 2 年 9 月 2 2 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : いじめ傍観者の援助行動を促進する要因及び教師と生徒のいじめ介入要因 ―日本と中国の分析を通して
論文審査委員 : (主査) 准教授 鈴木 朋子
(副査) 教授 杉森 伸吉 教授 佐藤 正光
教授 田村 均 教授 本田 勝久

学位論文要旨

本論文では、日本と中国におけるいじめの実態や性質・特徴の違いを明らかにした上で、いじめ傍観者がどのようにいじめ被害者を援助することが可能かを検討した。傍観者の援助行動という視点を設け、いじめ傍観者の援助問題のメカニズムの解明に取り組んできた。本論文では、まず、いじめに関する先行研究を概観するとともに、日本と中国でいじめを捉える理論的枠組みを構築した。次に、この理論的枠組みに基づき、日本と中国における中学生・高校生・大学生それぞれを対象に実践研究を行い、いじめ傍観者の援助行動を促進する要因及び教師と生徒のいじめ介入要因について比較検討を行った。本論文で得られた成果は以下の通りである。

序章では、本論文の背景を述べ、先行研究を検討し、本論文の目的と論文構成を示した。

第 1 部第 1 章では、いじめの概念を捉える枠組みと概念定義を行った。これらに基づき、日本と中国における「いじめ」の定義、態様、現状、法律及び解決の違いからみる「いじめ」をまとめた。

第 1 部第 2 章では、いじめ傍観者の援助行動について検討した。いじめ四層構造と傍観者の役割の観点から、いじめ傍観者の援助行動を促進する要因の先行研究をまとめた。さらに、日本と中国の教育と社会文化構造の違いをまとめた。

第 1 部第 3 章では、先行研究から得られた知見に基づき、本研究の目的を示した。

第 2 部第 4 章では、いじめの視点に基づき、日本の大学生に対する実態調査を行った。その結果から、日本と中国における高校生と大学生を対象としていじめ傍観者の援助行動を促進する状況要因を検討した。分析の結果、「被害者の特徴」、「加害者の集団性」、「いじめの種類」という 3 つの援助行動を促進する状況要因を見出した。日本では、①身体的いじめが発生した時、特徴がよくない被害者に対して、傍観者はいじめ援助行動をとりやすくなった。言語的いじめが発生した際、特徴（成績、性格、人間関係）が良い被害者に対して、傍観者はいじめ援助行動をとりやすくなった。②いじめの加害者が、集団の場合より一人の場合に援助行動をとりやすくなった。③言語的ないじめの場合、身体的いじめと比べて傍観者がいじめ援助行動をとりやすくなった。

一方、中国では、①被害者の特徴（成績、性格、人間関係）がよい時に、傍観者はいじめ阻止行動に入りやすくなった。②特に大学生を対象にした想起法で、いじめの加害者が一人の場合には援助行動をとりやすくなった。③言語的ないじめの場合、身体的いじめと比べて傍観者はいじめ援助行動をとりやすくなった。

第2部第5章では、「いじめ援助行動」を抑制する要因について日本と中国の高校生を対象に検討を行った。その結果は以下の通りである。

(1) 「いじめ援助行動を抑制する要因」の尺度を作成し、中国語版の準備を行った。

(2) 身体的いじめと言語的いじめ援助行動を抑制する要因について、日本と中国の高校生を対象に検討した。日本では、①身体的いじめでは、「いじめを止める」ことを躊躇させる潜在要因として「身体的いじめ関与の否定」、「事態の肯定」、「被害者への帰属」、「身体的いじめ関与への忌避感」の4因子が抽出された。②言語的いじめでは、「被害者への帰属」、「言語的いじめ関与の否定」、「言語的いじめ関与への忌避感」、「事態の肯定」、「加害者との関係」の5因子が抽出された。一方、中国では、①身体的いじめでは、「身体的いじめへの恐怖」、「身体的いじめ関与への忌避感」、「自己都合による身体的いじめへの無関心」、「被害者への帰属」、「他者都合による身体的いじめへの無関心」の5因子が抽出された。②言語的いじめでは、「言語的いじめの正当化」、「言語的いじめへの恐怖」、「言語的いじめ関与への無関心」、「言語的いじめへの事態肯定」、「言語的いじめを止めることへの躊躇」の5因子が抽出された。

(3) ネットいじめ援助行動を抑制する要因について、日本と中国の高校生を対象に検討した。日本では、「事態の肯定」、「無関心」、「いじめへの恐怖」、「助けの配慮」、「被害者への帰属」の5因子が抽出された。中国では、「ネットいじめへの無関心」、「被害者への帰属」、「ネットいじめへの恐怖」、「ネットいじめへの助けの配慮」、「ネットいじめへの事態肯定」の5因子が抽出された。

第2部第6章では、教師と生徒の関わりが教師へのいじめ相談に及ぼす影響に関する研究を行った。

(1) 日本における教師と生徒の関わりが教師へのいじめ相談に及ぼす影響を検討した。その結果、教師と生徒の関わりについては明確にできなかったが、いじめ問題の解決において児童・生徒と教師の関係性は非常に重要だと考えられた。

(2) 中国における教師と生徒のいじめ介入について、都市・農村・民族学校の中学生を対象として検討した。その結果、中国の地域にかかわらず教師にいじめを相談することが少なかったが、都市化されていない地域では、男子は教師との関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師に相談する傾向が見られた。

終章では、理論的研究と実践的研究において得られた知見について総合考察を行い、教育現場への応用の可能性を提案し、今後の課題について述べた。